“The 19th Annual Harvard East Asia Society Conference 2016” 参加報告

相関基礎科学系博士課程 2 年　山田理絵
（科学史・科学哲学　石原研究室）

報告者は、「博士課程学生のための国際研究集会渡航助成」の支援を受けて、2016 年 2 月 20・21 日に米国・ボストンのハーバード大学で開催された“the 19th Annual Harvard East Asia Society Conference 2016”にて口頭発表を行った。本学会は、東アジアを対象とした人文・社会科学的な研究を行う若手のための学会である。その目的は、参加者の報告により研究内容やアイデアについての学術的な議論を深めることはもちろん、それに加えて世界各国から集う様々な専門分野の学生が学際的な交流を行うことも目的とされている。

今年度の学会のテーマは‘[Re]imagining Asia’であり、プログラムは 20 日早朝、ハーバード大学名誉教授の社会科学者・Ezra Feivel Vogel 先生のオープニングスピーチから始まった。学会の規模は、2 日間で 22 のパネルが組まれ、約 70 人の参加者が報告を行った。参加者のバックグラウンドは実に多様であり、国立台湾大学、シンガポール国立大学、高麗大学、北京大学、香港中文大学、成城大学など東アジア圏の大学のほか、コーネル大学、ワシントン大学、マッギル大学、コロンビア大学、スタンフォード大学、シェフィールド大学、ベルリン自由大学など北米やヨーロッパ圏の大学に所属する学生もいた。こうした多数の地域・所属からの参加者が、それぞれの問題設定・方法論で「東アジア」を読み解く場に参加できたことは実に貴重な機会であったといえよう。

報告者は 21 日午後に開かれた‘Medicine and Society’というパネルで報告を行った。パネリストは 4 名で、ディスカッサントは医学史家（ハーバード大学教授）の Shigehisa Kuriyama 先生であった。報告者は “the History of Associations for Families of People with Mental Disorders in Japan” というタイトルで、発表を行った。その内容は、1960 年代から 2000 年初頭までの日本の精神障害者家族会の社会運動の概要と精神科医療へのインパクトの考察である。発表に対して、ディスカッサントの Kuriyama 先生のほか、会場からは複数のコメントや質問をいただいた。これらは、今後の自身の研究を精緻化し、非母国語での発表方法をより効果的に行う訓練を行うにあたって、重要なご指摘であった。

以上のように、今回助成をいただいて参加したボストンの学会での経験は、博士論文執筆を進め、またその後の研究キャリアについての考えを深めるにあたって、大変有益なものとなった。